

生き残りへの戦略 : Huckleberry FinnのJimについて

藤崎, 睦男
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1654381>

出版情報 : 言語文化叢書. 9, pp.135-145, 2004-02-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :



生き残りへの戦略

—Huckleberry Finn の Jim について—

藤 崎 睦 男

Twain は、少年時代から見知って来た複数の黒人をモデルにして、Jim の人物像作ったとされているが、その人物像は、時代の経過の中で、次第に複雑さを増して来たと言える。そして、今日では登場人物の中で最も矛盾に満ちた人物像として立ち現れて来る。Adventures of Huckleberry Finn(1885) が出版された当時は、Jim への注目度は概して低く、単に登場人物の一人としてのみ言及されることが多かったが、今日までの展開を予兆するかのように、当初からその性格の描かれ方に注目する批評家も、例外的にはあった。¹⁾ 爾来、次第に Jim の重要性が認識されるようになったが、それでもしばらくは、彼の人物像が、 minstrel・ショー的黒人のステレオタイプという枠を、出ることにはなかった。

Jim の人物像が、基本的には minstrel 的伝統に沿って作られたにもかかわらず、同時にその枠からはみ出るような性格の複雑さを合わせ持つ、と指摘したものとして特筆すべきは、Ralph Ellison の次の一文であろう。

Twain fitted Jim into the outlines of the minstrel tradition, and it is from behind this stereotype mask that we see Jim's dignity and human capacity--and Twain's complexity--emerge. Yet it is his source in this same tradition which creates that ambivalence between his identification as an adult and parent and his 'boyish' naïvete, and which by contrast makes Huck, with his street-sparrow sophistication, seem more adult. (379)

ステレオタイプの Jim が威厳と能力を帯び始め、大人で父親的性格を持ちながら、同時に子供のようなナイーブさを合わせ持つ。創作する側の Twain の "complexity" が論じられ、創作された側の Jim が、 "stereotype" から "ambivalence" へと変貌すれば、あとは彼の人物像はあらゆる方向へと解釈の幅を広げて行くことが可能になる。例えば、Leslie A. Fiedler は Jim と Huck の関係の中に "homoerotic" なイメージを読み取り、Lionel Trilling は、Jim を、Huck と「聖なる共同体」 "a community of saints" を形成する "true father" と考える。Ellison が指摘した Jim の持つ相反する特徴は、一方では笑劇中の黒人の持つ単純さ、愚かさ、善良さ、子供っぽさ等であり、他方では Jim が筏の上で見せる父親的威厳と能力であ

るが、二種類の対立的特質は容易に混ざり合い、プラスのイメージのみが強調され、やがて Jim が無垢で善良であるとともに威厳を兼ね備えた、「聖なる共同体」の父親というイメージを持つに至る可能性は、大いにあったと言えよう。その意味では、Trilling の解釈は一つの帰結と言えるかも知れない。

ここまでの Jim の人物像は、愚かさであれ善良さであれ、聖なるイメージであれ、いずれにしろ受け身の性格を示している。そこには、自ら道を切り開いて行こうとする積極的な姿は浮かんでこない。抑圧される側が、善良で聖なる者であれば、暴力に訴えてでも、現状を変革しようとする行動にはでないだろう。とすれば、これも抑圧する側にとって御しやすい、望ましい黒人奴隷の特質に他ならない。つまり、Jim のミンストレ尔的姿が白人社会に都合の良いステレオタイプなら、これとて同じステレオタイプの枠を出ていない。しかし、Jim のイメージはここで固定されることはなく、さらに増殖して行く。それは、これまで受け身の姿でしか捉えられなかった Jim に、より人間的な積極的な個性が付与されて行く過程でもある。

James M. Cox は、まず Trilling が指摘した Jim の聖人としての人物像を踏まえ、そこを出発点とする。そして、聖なる Jim が持つ犠牲者としての特徴に対して、Huck が「抜け目ない」("shrewd")少年であることを、*"the more Jim is made a saint the more he is likely to be the humble victim lacking any semblance of the shrewd humanity Huck so amply possesses."* と、指摘する。しかし、その後すぐに、*"Yet surely Jim is shrewd, as shrewd as Huck."* (175)と、これまでの Jim の人物像にはおよそ当てはまらない「抜け目ない」という性格を、唐突にも付け加える。ここで Jim が Huck に劣らず「抜け目ない」ことをを示す一例として、Cox が掲げる箇所は、9 章の*"the floating house"*内で発見された Pap の死体についての、Jim の Huck に対する対応の仕方である。

We know and admire Huck as a liar but are prone never to realize that Jim lies to Huck about Pap's death. He does not elaborate a lie about it; he simply conceals his knowledge from Huck. Though one of his motives for evading Huck's query about the dead man in the floating house may be his tender wish to spare Huck the knowledge of being an orphan, Jim has good reason to suspect that a Huck free of his Pap might leave him high and dry. (175)

Jim は、Pap が死んだという事実を Huck に隠す。その理由の一つとして、まず Cox が指摘するものは、前者の、孤児になったと言う事実を知らせまいとする後者への思いやりである。これは一応納得の行く、妥当な答えであろう。そして、もう一つのより大きな理由は、自己保身のためであると言う。つまり、Pap の暴力から逃れることが、Huck の逃避行の最大の理由とするなら、Pap の死によって Huck は逃げる理由がなくなってしまう。従って、Jim は Huck が逃亡を止め、自分が見捨てられることを恐れ、事実を隠した。よって、

Jim は自己の利益のためには事実を隠し、結果的に嘘をつく程に"shrewd"である。この説明は、虚をつかれたようだが、それだけに面白い解釈である。

Forrest G. Robinson は Cox の説に沿って、Jim が最後まで、Pap の死を隠し通さなければならなかった必然性を、さらに綿密に分析している(366-8)。補足を加えながら彼の説を要約すると、Jim は Huck を殺害したとされているため、後者は前者の無実を証明するための生き証人として必要である。彼が、万が一捕まる場合には、Huck がそばにいて、Huck 殺しの濡れ衣を晴らしてくれなければ、逃亡奴隷の罪に加え殺人犯にされてしまう。さらには、社会と接触ができない逃亡奴隷の Jim にとって、Huck は外部からの災難に対して、眼となり耳となって、危機を回避する手段である。Huck が Pap の死を知って、逃避行から離脱すれば、その時点で Jim の逃亡も不可能となる。従って、"from the beginning he [Jim] needs him desperately"であり、Huck は"Jim's best chance for survival"(367)であったと言えるのだ。例えば、難破船 Walter Scott に一人取り残されたと思った時、Jim は溺死を覚悟する。しかも、彼の境遇をさらに絶望的にするのは、たとえ救助されたとしても、それは同時に逃亡奴隷としての捕縛を意味するのだ。実際、彼は、"whoever saved him would send him back home so as to get the reward, and then Miss Watson would sell him south, sure."(93) と、死より恐い南部へ売却されることを予測する。Jim は、この八方ふさがりの状況からも、Huck の存在が自分の生存の必要条件であることを十分に認識していたと言える。16 章で、奴隷狩りの男達から巧みな嘘によって Jim を救ったのも Huck であり、これも、彼無くしては、Jim の逃亡はほとんど不可能だといえる一例であろう。Huck を自分のそばに置いておくか否かは、Jim にとって生死に関わる問題である。それゆえ彼には、Pap の死を隠し通さざるを得ない必然性があつた、という説明は、極めて明解で説得力があると言えよう。同時に、この解釈によって、Jim の人物像は、これまでの受け身の姿勢を超えて、積極的に運命を切り開こうとする人間として現れて来る。言い換えれば、白人である Huck と、いかにして筏の上で共生して行くかについての戦略を駆使する個性を持った一個人として、描きだされる。

Jim が筏の上での Huck との生き残りのために使った戦略は、彼の「抜け目なさ」によって説明された。それは、取りあえず逃亡中の目下の危機をやり過ごすための手段である。しかし、彼の最終目的は、逃亡の完遂の後に、さらなる困難をのりこえなければ達成できない。彼の戦略は単に一時的な方便から、さらに広い視野に立ったより複雑な戦略へと、その意味の厚みをまして行く。このことを検証するために、Cox および Robinson の説に敢えて疑問を呈することから始めてみたい。それは、もし逆に Jim が Huck に Pap の死をその場で隠さず知らせたとした場合、Cox が言うように、Huck は本当に Jim を見捨て、逃亡を止めただろうか…という素朴な疑問である。この疑問に答えるためには、Huck はそもそもいかなる理由で Jim と共に Mississippi 河を下る逃避行に入ったのか、彼自身の動機をテキストに即して見直してみる必要がある。

逃避行以前の Huck は、widow Douglas を後見人とする教育と躰を受けるか、そうでな

ければ元の浮浪児に戻り、Pap の暴力に怯えて暮らすかの二者択一を迫られる状態にある。彼は、widow の元で、"civilize" される窮屈な生活を嫌っているが、かといって Pap に狭い小屋に閉じ込められ、暴力を振るわれる事にはそれ以上に耐えられない。やがて、Pap は、Huck を自分のものにするため、widow と Judge Thatcher の手の届かない遠い場所("a place six or seven miles off") に閉じ込めようとする。この時、Huck は"take to the woods when I run away"と、始めて父親からの逃亡を考え、

I guessed I wouldn't stay in one place, but just tramp right across the country, mostly night-times, and hunt and fish to keep alive, and so get so far a way that the old man nor the widow couldn't ever find me any more. (32)

と、その具体的な計画を立てる。この段階では、逃避の経路は川ではなく森、少なくとも陸路である事が明示されている。その後、川の増水によって流されて来たカヌーを手に入れると、"I struck another idea; . . . 'stead of taking to the woods when I run off, I'd go down the river about fifty mile"と述べ、陸上から川による逃避に簡単に変更する。さらには、"camp in one place for good, and not have such a rough time tramping on foot." (38) と、歩き回って辛い思いをするより一ヶ所に留まることを選ぶ。最終的には、野豚の血を利用して、殺されたように偽装工作し、自分を探す者は誰もいないと安心すると、時々食料を盗みに行くことが出来る程度に町に近く、しかも人の出入りの少ない場所を希望する。具体的には、Jackson 島を逃避場所として選択する。そこは、普段 Tom や Joe Harper と共に冒険を楽しんだ、遊び慣れた島である。以上の Huck の逃亡方法と場所の決定に至る迄の過程を見ると、彼ができる限り苦勞せずには逃げて、気楽に過ごせて、町に近い場所を選ぼうとしているのは明らかである。それは、彼が Tom と共にこれまで幾度となく経験した「遊び」という日常の域を出ていない。重要なことは、Huck が決して危険に満ちた本格的な逃亡を、最初から意図していた訳ではないということである。

Huck のこのような「遊び」の域を出ない逃亡計画を覆したのは、Jackson 島への Jim の予期せぬ侵入である。最初は、Jim という仲間を得、外の嵐を避け心地よい洞穴の中で食事をしながら、Huck は"I wouldn't be nowhere else but here"と、島での生活に満足し、彼の「遊び」は予定通りに進むかに見える。しかし、Huck が川下の一軒家に町の様子を探りに行った時、その夜 Jackson 島で逃亡奴隷の搜索が行われるとの情報を得る。慌てふためいて島に帰った Huck は、この時、気楽で近い場所という最初の計画を捨て、Jim と共に遠くて困難な場所を目指して逃げる決心をするのである。自分だけが当面の危機を避けるつもりなら、楽で近い場所を選び、例えば、もう一つ川下の島にでも逃げ、一晚やり過ごせばすむ事であった。逃亡奴隷という常に搜索の眼に怯えなければならない者と行動を共にする事は、自分もそれだけ見つかる危険性が大きいということではないか。それなのに何故故敢えて Jim と共に行く長く遠い危険な旅を選んだのか。

上記の引用部で Huck 自らも言っているように、彼の逃避行の第一の理由は、Pap や widow による拘束された不自由な生活から逃れたいという思いである。しかしながら、兩人から逃げたいという彼の意識の中にもう一つの異質な心理状態が生じているのを見のがすべきではない。それは、Huck が野豚を殺して偽装工作をしている最中に、Tom の不在を託つ部分から推測される。

I did wish Tom Sawyer was there, I knowed he would take an interest in this kind of business, and throw in the fancy touches. Nobody could spread himself like Tom Sawyer in such a thing as that. (41)

Tom は遊びの天才であり、Huck にとっては遊びにおける言わば指導者である。Pap から逃げるための周到な準備をする Huck の中には、逃げたいという願望と共に、その行為自体に Tom との遊びや冒険を始める時と同様の期待感があったことを、確認しておかなければならない。

ここで Huck と遊びの関係について考えてみよう。1 章で Huck が widow や Mss Watson によって"sivilize"されることに耐えられなくなり、家を逃げ出し元の浮浪児の生活に戻り、再び自由を得て満足していた時、Tom に遊びに加わるように誘われる。

But Tom Sawyer he hunted me up and said he was going to start a band of robbers, and I might join if I would go back to the widow and be respectable. So I went back. (1-2)

Huck は Tom と遊べるなら、居心地の良い浮浪児の生活を捨ててさえも、あれ程忌み嫌っていた widow との生活に戻ってしまうのである。通常 Tom の oxymoron を含んだ表現が笑いを誘う場面として、記憶される箇所であるが、Huck が遊びに対していかに魅力を感じているかが、うかがい知れる場面としても、注目できる。やがてそのような Huck も少年の常として Tom との同じような遊びの繰り返しに飽きて来る。或日 Tom の言う通りに古いブリキのランプを擦っても何も出てこないで、"So then I judged that all that stuff was only just one of Tom Sawyer's lies. I reckoned he believed in the A-rabs and the elephants, but as for me I think different. It had all the marks of a Sunday school." (17) と、Tom の話が過度の空想癖による嘘である事を認識する。このように Huck は Tom の遊びの本質を見抜き、現実を見据えてはいる。しかし、それにもかかわらずその後の逃亡の途中、幾度も Tom の不在を残念がる事があるように、Tom との遊びが持つ魅力は、Huck の頭の中から決して消える事はない。結末部での Jim の救出劇という Tom の遊びに加わったのも、その抗し難い魅力が一因だったと言えよう。

2 章において、追っ手が差し向けられるとの情報を得て、島に帰った Huck は、"Git up and

hump yourself, Jim! There ain't a minute to lose. They' re after us!"(75)と叫ぶ。この時、Huck の中ではすでに、Jim と自分との区別はなくなっている。"you"ではなく"us"と言ったところに、そのことは如実に表れている。この場合、追っ手の対象は自分ではなく Jim なののである。Leo Marx はこの部分に注目して、これは Huck の"unpremeditated identification with Jim's flight from slavery"(282)であるとし、Huck の人間性を賞賛している。確かに、そのような一面も否定できないが、これまで Tom や仲間達との遊びの中で描かれた Huck の性格との整合性を考えれば、Jim との一体化には、Jim を救おうとする気持ちよりも、むしろ遊びへの誘惑の方が強かったと考えるのが、ごく自然な流れだと言える。逃亡奴隷の Jim がこのままでは追っ手に捕まってしまうと分かった時、Jim を救おうと考えたとしても、そう思ったのは一瞬であったはずで、長くは続かなかったはずだ。何故なら、Huck は、この後も黒人奴隷を盗むことを罪だという社会通念に支配され、Jim の居場所を Miss Watson に知らせる手紙を出そうとさえする(269)。Huck にとっては、Jim の置かれた状況の危険性やドラマ性は魅力的であり、Jim の逃避行に自分の冒険を重ね合わせる事によって波乱に満ちたものとし、自らの遊び心を満足させようとする意図が存在した事を否定する事は出来ない。²⁾

このことは二人が難破船を見つけた時の Huck の態度によっても確認できる。人に見られる事を恐れ、猛烈に反対する Jim とは対照的に、Huck は船内の様子を見ることを主張する。Huck にとっては、この逃避行が遊びや冒険的要素を含んでいることは以下の言葉から明らかである。

Do you reckon Tom Sawyer would ever go by this thing? Not for pie, he wouldn't. He'd call it an adventure--that's what he 'd call it; and he'd land on that wreck if it was his last act. And wouldn't he throw style into it?--wouldn't he spread himself, nor nothing? Why, you'd think it was Christopher C'lumbus discovering Kingdom-Come. I wish Tom Sawyer was here.(81)

Huck の頭の中にあるのは、Tom が取るであろう行動に倣って、難破船での"adventure"を楽しむことである。逃亡奴隷という危険な立場にある Jim の抱く懸念や恐れに対しては、想像力のかけらさえない。もし、Huck の第一の関心事が Jim の逃亡の成功にあるのならば、彼は難破船には近付かなかったはずである。

以上が Huck の側の事情である。次に問題になるのは、Jim との逃避行に Huck がつきあった大きな理由は、より劇的な冒険をして、遊び心を満足させることにあるという、この Huck の本音を Jim も知っていたかという事である。二人が Jackson 島で出会い、Huck が島まで逃げて来た経緯を話した時、Jim もまた Tom のことを引き合いにだす。

Then I told him the whole thing, and he said it was smart. He said Tom Sawyer

couldn't get up no better plan than what I had. (52)

つまり Jim は Huck の話の内容を聞き、凶暴な Pap からの逃亡が困難であったにもかかわらず無事に成功した結果を喜ぶのではなく、Tom でさえこれ以上の計画は立てられなかったろうと、Huck の計画の見事さを誉める。明らかに、Jim は視点を自分の位置から移動して、Huck の位置に合わせている。Huck の逃亡が自分の生死をかけたそれとは異なり、Tom 的冒険や遊びの要素が入ったものである事を認識し、Huck と同じ視点、つまり遊びの視点で喋っているのである。Jim は、逃避行に Huck が参加するのは、彼の遊びの延長で、より劇的な冒険を望むためであり、Pap から逃げる事が唯一の理由ではないことは最初から分かっていたのである。この事は、前述した難破船において、危険を無視する Huck と自分との現状認識の違いによって確信に変わったはずである。とすれば、Cox や Robinson の主張する理由以上に、Jim にはより計算された理由が考えられることになる。つまり、Jim が、もし"shrewd"であるとするなら、それは Huck を逃亡に利用するため、Pap の死を隠したこと以上に、自らの生命を賭して実行した逃亡が、白人少年にとっては冒険であり遊びであるという事実が分かっているながら、その事を逆手に取り、Huck の思惑に乗って目的を達成しようとする、したたかな戦略を取ったからである。

次に、Cox がむしろ控えめに揚げた一つめの理由、つまり Jim の"tender wish to spare Huck the knowledge of being an orphan"という、Huck への「思いやり」について検証してみよう。当初 Huck にとっては、逃げる事自体が目的であった。つまり図式的な言い方をすれば、Pap の暴力と widow の嫉と教育に象徴される文明の拘束から逃れ、Mississippi 河に象徴される自然の中で、何ものにも拘束されずに、勝手気ままに暮したいというものである。対する Jim の目的は、奴隷制の束縛から逃げるだけでなく、その上でさらに自由を手に入れ、家族を取り戻すことである。それは拘束から逃げ出しさえすれば眼前に自明のものとしてあるのではなく、さらに時間と労力を費やして、一つずつ取り戻していかなければならない気の遠くなるような作業である。だから、Jim は自由州に逃れるだけでは、目的を達成したことにはならない。自由州に到達した後の計画について、彼は筏の上で次のように語っている。

He was saying how the first thing he would do when he got to a free State he would go to saving up money and never spend a single cent, and when he got enough he would buy his wife, which was owned on a farm close to where Miss Watson lived; and then they would both work to buy the two children; and if their master wouldn't sell them, they'd get an ab'litionist to go and steal them. (124)

つまり奴隷制度によって破壊された自らの家庭の再構築が Jim にとっての自由の具体的姿なのであり、そのためには自分から引き裂かれた妻と二人の子供を買い戻さなければなら

ない。Jackson 島でソロモン王の裁きの逸話が話題になった時、意見の対立する Jim にいらだつ Huck は、あくまでも王の賢明さを主張し、"But I tell you you don't get the point." と言う。それに対して Jim は次のように反論する。

I reck'n I knows what I knows. En mine you, de real pint is down furder--it's down deeper. It lays in de way Sollermum was raised. You take a man dat's got on'y one er two chillen: is dat man gwyne to be waseful o' chillen? No, he ain't; he can't 'ford it. He know how to value 'em. But you take a man dat's got 'bout five million chillen runnin' roun' de house en it's diffunt. He as soon chop a chile in two as a cat. Dey's plenty mo'. A chile er two, mo'er less, warn't no consekens to Sollermun, dat fetch him! (96)

Jim はこの旧約聖書の中の物語りが意図したもの、widow や Huck 等の白人側の読み、を誤読する。つまり、従来の解釈を、自らの境遇に引き寄せることで解釈し直す。一人の子供を引き裂く事は、大勢の妻子を持つ男にとっては何でもない事だと、Jim が言う時、彼の心の中では、自分自身の文字通り引き裂かれた家族、そして無制限の自由を享受し、なんの痛痒も感じず黒人奴隷の家族を引き裂いた、白人の姿が二重写しになっていたのではないか。Jim にとっては、ソロモン王の演じる裁きは王の賢明さを証明するものではなく、王の他人に対する無神経さと残忍さを表し、同時にその行為は、家族を引き裂く過酷な運命を自分に与えた、奴隷所有者の理不尽な暴力の隠喩ともなる。

また Jim の家族を引き裂いた同じ力は、Jim と娘との関係の修復も不可能にしている。ある日、Jim は娘の 'Lizabeth にドアを閉めるように言っても、彼女はただ笑いながら立っただけなので、彼はつい激して彼女を殴ってしまう。娘は、実は猩紅熱にかかって耳が聞こえず話す事も出来なくなっていたのであるが、ようやくその理由が飲込めた後、彼は後悔の念に責め苛まれる。

O, Huck, I bust out a-cryin', en grab her up in my arms en say, 'O de po' little thing! de Lord God Amighty forgive po' ole Jim, kaze he never gwyne to fogive hisseff as long's he live!' O, she was plumb deaf en dumb, Huck, plumb deaf en dumb--en I'd ben a treat'n her so! (202)

奴隷の身である上に傷害を負わなければならないという娘の過酷な運命を思う時、父親である Jim にしてみれば身を切られる思いであろう。そのような境遇に陥った娘に、知らぬとはいえ、暴力を振るってしまった自らに対する自責の念は深い。自分の行為を償うただ一つの方法は、毎日の家庭生活の中で父親として愛情を込めて接し、育てて行く以外にはあるまい。しかし家族が引き裂かれた今の Jim にはそれすら不可能である。

このような家族への、とりわけ娘への思いを、喪失感と自責の念の中で持ち続ける Jim にとって、Huck と Pap の親子関係は決して他人事では済まされなかった。彼等の親子関係も（責めは Pap にあるとはいえ）引き裂かれた状態にあり、あるべき姿に戻すための唯一の方法は、家庭の修復という同じ問題として、Jim は捉えていたと言えよう。しかし、生きている限り一縷の望みはあるものの、死ねば償いも修復も家族の再構築も全て永久に不可能となる。Pap の死体を目の前に見た時、Huck に知らせたくない以上に、Jim 自身がこの現実を認めたくなかったのだ。そこには単なる"tender wish"をはるかに超えた、自らの境遇を顧みる所から来る、家庭崩壊という悲劇を克服しようとする、決断に似たものがあったと言えよう。

Jim が最後になる迄 Pap の死を明かさず、話題にもしようとしなかった理由を、さらに補足するなら、以下のようなことが考えられる。Huck は、"the floating house "から島に帰った後、Jim が見た死人の話を聞こうとするが、Jim は次のような理由で断る。

He said it would fetch bad luck; and besides, he said, he might come and ha'nt us; he said a man that warn't buried was more likely to go a-ha'nting around than one that was planted and comfortable.(63)

これは、単なる言い訳ではない。実際数々の迷信を信じ、それを行動の指針としている Jim にとっては、死体は凶兆であり、扱い方を間違えば彼に付きまとう悪運ともなりえる。同時に、死という現実、生きて家族に会い家庭を再構築しようとする者にとって、永遠に希望を打ち砕く最悪の障害である。Pap の死体は、同じ父親という立場にある Jim 自身の死を連想させる。常に死と隣り合わせの逃避行をしている者にとっては、容易に自分の姿を死体と二重写しにする事が出来よう。したがって、Jim は自らの死を暗示する Pap の死体を見た事実そのものを、極力忘れようとし、話題にする事さえも忌避したのである。逃避行が終わり奴隷の身分から解放されたと知った時、そして、働いて家族を買い戻し、家庭を再構築するという第二の旅への出発点に立つことができた時、Jim は始めて Pap の死という事実を Huck に告げる心の余裕が出来たのである。

(註)

1) 例えば、1885 年 1 月に、Brander Matthews は、短いが当時としては異例の長さで、Jim についてその人物像を語っている。"Jim is an admirably drawn character. There have been not a few fine and firm portraits of negroes in recent American fiction, of which Mr. Cable's *Bras-Coup* in *The Grandissimes* is perhaps the most vigorous, and Mr. Harris's *Mingo* and *Uncle Remus* and *Blue Dave* are the most gentle. Jim is worthy to rank with these; and the essential simplicity and kindness and generosity of the Southern negro have never been better shown than here by Mark Twain." (262)

2) Huck の性格は Trilling の次の言葉が的確に説明している。"Huck does indeed have all the capacities for simple happiness he says he has, but circumstances and his own moral nature make him the least carefree of boys—he is always 'in a sweat' over the predicament of someone else." (273) Huck には本来楽しくありたいという遊び心によって、行動している。Cox は、Huck の中に、"the essential pleasure principle of ease and handiness" (179) の存在を指摘している。この時代の知的風土において支配的な思想の一つであった utilitarianism は、快楽を得、苦痛を回避しようとする欲求が、人間の行動の唯一の動機と考えた。この考えは Huck の中に明示されていて、彼は基本的には、不快を最小にし、安楽を最大にするような道徳的選択をする。もちろん、Trilling も指摘するように、窮地に陥った友人を救う時には、Huck は功利主義的理性より "sound heart" に従うのだが (Camfield 329-330)。

Works Cited

Camfield, Gregg. *The Oxford Companion to Mark Twain*. Oxford UP, 2003.

Cox, James M. "A Hard Book to Take." *One Hundred Years of Huckleberry Finn*:

The Boy, His Book, and American Culture (1985); Rpt. in *The Critical Response to Mark Twain's Huckleberry Finn*. Ed. Laurie Champion. New York: Greenwood Press, 1991. 171-186.

Ellison, Ralph. "Change the Joke and Slip the Yoke." *Partizan Review* 25

(1958); Rpt. in vol. 2 of *Mark Twain: Critical Assessments*, 4 vols. Ed. Stuart Hutchinson. Helm Information, 1993. 379-380.

Fiedler, Leslie A. "Come Back to the Raft Ag'in, Huck Honey!" *Partizan*

Review 15 (1948); Rpt. in vol. 3 of *Mark Twain: Critical Assessments*. 263-269.

Matthews, Brander. "Huckleberry Finn." *Saturday Review* 59 (1885); Rpt. in

- Mark Twain: The Contemporary Reviews Ed. Louis J. Budd. Cambridge UP., 1999. 260-263.
- Marks, Leo. "Mr Eliot, Mr Trilling, and Huckleberry Finn." *The American Scholar* 22 (1953); Rpt. in vol. 3 of *Mark Twain: Critical Assessments*. 280-293.
- Robinson, Forrest G. "The Characterization of Jim in Huckleberry Finn." *Nineteenth-Century Literature* 43.3 (1988) 361-391.
- Trilling, Lionel. Introduction to *The Adventures of Huckleberry Finn*. (1948); Rpt. in vol. 3 of *Mark Twain Critical Assessments*. 270-279.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. Berkeley: University of California Press, 2001.